



山の雪解け模様を楽しむ ファジーでルーズな集合体 —国際雪形研究会—

納 口 恭 明

山の雪解けが進むとともに山腹に現れる、残雪と山の地肌が作り出す白黒模様。このまったく無意味と思われるまだら模様を眺めるためにのみ、年に1度だけ全国各地からメンバーが集って開催される研究会がある。会員が固定されているわけではない。関心を持ったときから会員で、やめたいと思えばその瞬間に退会となる。したがって、会員数を把握することはできない。本稿では、このまだら模様「雪形（ゆきがた）」の魅力と、一見、怪しげな研究会「国際雪形研究会」について紹介する。興味を持たれた読者はすでに会員とさせていただきたい。

キーワード：伝承、雪形、自然観察、科学教育、遊び心、国際性、文化遺産

1. はじめに

1994年、突如、自然発生的に出現した「国際雪形研究会」は、その後、会則・会費・会員等、一切曖昧のまま、ファジーでルーズな集合体として増殖を開始し、現在に至っている。主な活動は年1回、1泊2日で行われる雪形ウォッチングと雪形ミニシンポジウムだけである。

おそらく、国際雪形研究会の存在を知っている読者はほとんどいないと思うが、そもそも「雪形（ゆきがた）」と言う言葉自体も、認知度は必ずしも高くはないであろう。「雪の結晶の形のこゝ？」と考える人も少なくない。ただ、雪形を初めて知った人の多くは強い興味を持ってくれる。

2. 雪形とは

雲や林、天井のしみ、山の形を見ていて、何かの形を連想することがあるように、雪融けの頃の山肌の黒い部分と残雪の白い部分がつくりだす大小様々な形からなる白黒のまだら模様は、空想を膨らませて見るといろいろな姿形に見えてくる。自然の気まぐれのようなこの白黒のまだら模様は、地形・植生・気候が大きく変わらない限り、雪解けに伴う形の変化がほぼ毎年同じようになり繰り返される。もし、ドラえもんタイムマシンで道や建物など目印となる人工的な構造物のない大昔にさかのぼったとしても、このまだら模様は春になると、今と変わらぬ形で迎えてくれるはずである。

このような残雪と山の地肌が作り出す形を、日本では古くから、「種まき爺さん」、「代かき馬」、「川の字」など人、動物、文字、物などに見立て、田植えや種まきなどの農作業をはじめの合図として、あるいは水不足や豊凶などを占う目安として使用し、伝承していたといわれている。

これは一般に「雪形（ゆきがた）」と呼ばれ、北海道から中国、四国地方にいたるまで日本全国の積雪地帯に広く伝承されていたことが知られている。雪形には山の地肌の黒を背景とし、残雪の白を形としてみる白いタイプ（写真—1）と、逆に白を背景とし、黒を形としてみる黒いタイプ（写真—2）がある。

国際雪形研究会は、この残雪とまだら模様だけを素材に、科学、文化、芸術、遊びを探究するグループである。年齢、性別、国籍、職業によらず豊かな感性と遊び心さえあれば、誰でも会員として一緒に雪形を楽



写真—1 福島県吾妻小富士の白いタイプの雪形「雪うさぎ」



写真一 新潟県妙高神奈山の黒いタイプの雪形「跳ね馬」

しむことができる。

2. 雪形の現状

雪形は季節の風物詩としてしばしば、その出現が地方の新聞でも記事となり、雪形を知っている一部の人の関心を集めている。有名なものは観光資源としても利用され、人気も高い。しかし、その一方で、現在では、農事暦としての実用上の役割はなくなり、雪国で生活する人々の日常生活からも縁遠くなり、伝承という形態はすでに存在しないに等しい。また、一部の有名な雪形を除き、たとえ文献上では存在していても、実際に残雪模様のどれかを確認することはむずかしい。それは、伝承のあった雪形の多くが名前だけで特定できるほど、わかりやすい形となっていないからである。田淵（1981）は日本全国で約 300 の雪形を紹介しているが、このうち、実際に特定できるのは約半数に過ぎない。

研究の対象としての雪形は古くから主に民俗学の分野に属しており、自然科学的な視点からの研究はほとんどなかった。このため、文献には名称や伝承についての記述はあっても、雪形を地形図上に示したものは全くと言っていいほどない。したがって、写真やスケッチでの記録、あるいは、それを知る地元の人の説明がなければ複雑な残雪の白黒模様の中から目的とする雪形を特定することはほとんど不可能である。

3. 雪形の科学

雪形が現れてから消えるまでの形とその変化を支配する基本的な要素は、雪の積もり方と融け方のふたつである。雪がどこでも同じように積もり、同じように融けると雪形の白黒模様は現れない。雪の融け方につ

いては、同じ向きの斜面では雪面からの融解はほぼ一様であり、したがって、雪形が現れるのは雪の積もり方が一様でないためである。

このような一様ではない積もり方を生み出す一番大きな理由は地形の凹凸である。一般に、地吹雪のような風による雪の移動や、大規模なものは雪崩に代表されるような重力による雪の移動は急斜面の雪を少なくしたり、地形の凹凸をなめらかにするように作用する。その結果、一様ではない積雪分布ができあがる。それが融けはじめると、積雪量の少ないところから黒い地肌が現れ、それが広がり、残雪の白い部分が消え去って雪形の季節が終わる。雪形の出現が毎年繰り返されるのは、数十年、数百年の期間では積雪量と地形が大きくは変動しないためである。したがって、雪形の出現時期、出現から消滅までの形の変化、それらの年ごとの変化には積雪、融雪、地形、植生の情報が隠されている。

とくに、雪形の現われる時期については気象条件と関係し、冬の間は雪の量と春の暖かさが敏感に反映され、大きいときで1ヶ月程度の変動をすることもある。このため、雪形がいつ現れるかは冬と春を合わせた地球の暖かさ寒さの指標としての意味を持つ。また、雪融けにともなう雪形の形態の変化は複雑な山の積雪の分布の推定のための情報として、さらに、地滑りなど、地形の特徴を解説するための情報として利用することもできる。

4. 雪形伝承復活への道

失われつつある貴重な雪国の文化遺産としての雪形の現状、雪形のもつ科学的な意味について述べた。ところで、雪形は伝承の消失とともに消えるだけのものなのか？雪形伝承復活へのポイントを述べたい。

たとえば科学的な素材としての雪形は必ずしも歴史的に伝承されて来たものである必要はない。誤解を恐れずにいえば、その時代その時代にあった新しい雪形を見つけ、新たなネーミング、科学、お話などをセットにして、新しい伝承のスタートとしてもいいのではないか。ただし、それが伝承として定着したかどうかは後世の人が判断することである。

文字どおり星の数ほどある残雪模様は特殊な観測機器なしでも興味ある人すべてにもれなくオリジナルの雪形をプレゼントしてくれる。またスケールを変えて、例えば宇宙から見た雪形や火星に現れる雪形というのも雪形の新しい視点かもしれない。また、海外に目を向けてみると、日本以外にも残雪の白黒パターンに名



写真-3 雪形ウォッチングに出発する前のポーズ（国際雪形研究会提供）

前をつけている例はノルウェー・アメリカ・スイス・カナダ・ニュージーランド等でも散見できる。しかし、外国には「雪形」に相当する言葉はない。したがって「yukigata」も「津波 (tsunami)」のように国際用語として使われ出すのも夢ではない。

まとめると雪形には、①失われつつある文化遺産としての要素、②自然観察の素材としての科学的要素、③外国人にもアピールする国際的要素、④想像力・遊び心を大いにくすぐる癒しの四つ要素がある。国際雪形研究会はこれらすべてを会員みんなで楽しむための集団である。全国各地を回る雪形ウォッチングではそ

れぞれの開催地で言い伝えられていた昔からの雪形を眺めるとともに、新しい自分だけの雪形を発見・自慢する雪形ウォッチングと、各自が1年間ためた雪形ネタを披露するミニシンポジウムからなる。2007年は北海道の羊蹄山・ニセコで第13回雪形ウォッチングが5月に開催された。次回、2008年の第14回雪形ウォッチングは、日程は未定だが、長野県北アルプスを予定している。

まだ、雪形の世界的な権威は一人もいないので、世界的な権威になるなら今がチャンスである。関心のある方は下記までご連絡願いたい。

〒305-0006 茨城県つくば市天王台3-1

独立行政法人 防災科学技術研究所

納口恭明

e-mail : nhg@bosai.go.jp

JICMA

《参考文献》

田淵行男：山の紋章 雪形，学習研究社，371pp（1981）。

【筆者紹介】

納口 恭明（のうぐち やすあき）
独立行政法人 防災科学技術研究所
総括主任研究員
（国際雪形研究会世話人）

